



Data
監督：池田敏春
脚本：西岡琢也
原作：織田作之助『秋深き』『競馬』 (講談社文芸文庫刊)
出演：八嶋智人 / 佐藤江梨子 / 佐藤 浩市 / 赤井英和 / 渋谷天外 / 山田スミ子

みどころ

オダサクこと織田作之助の大阪モノが、現代の大阪を舞台に復活！テーマはおっぱい。いやそうではない。北新地のホステスと中学教師とのちょっと変わったラブストーリー。背が高く美しく、そしておっぱいが魅力の女性は男にとって最高。しかしその反面、男の嫉妬心は・・・？大阪の北新地と生國魂神社周辺を舞台として展開されるちょっぴり悲しい大阪版ラブストーリーは、秋の夜長にピッタリ！

■オダサクの大阪文学が、現代の大阪に■

オダサクこと織田作之助は昭和の文豪だが、その作品の特性は『夫婦善哉』をはじめ、出身地である大阪を舞台とし、大阪人の人情の機微を描いていること。1947年に、33歳の若さで死亡していなければ、その後の朝鮮特需、高度経済成長、大阪万博に至る伸び盛りの大阪の姿を興味深く描いてくれたことだろう。

東京への一極集中が進んでいるご時世の中、そんなオダサク文学が現代の大阪を舞台として映画化されることになったのは、プレスシートによると脚本の西岡琢也氏の努力によるものらしい。オダサクが生まれたのが大阪の上汐町と聞くと、私にはいかに親しみが湧いてくる。それは、私は1996年～2001年まで四天王寺のマンションに住んでいたから。したがって、上汐町は、もちろんこの映画に登場する生國魂神社や中学校教師の寺田悟（八嶋智人）と北新地のホステスから今は寺田に身も心も尽くす妻川尻一代（佐藤江梨子）の二人が住むマンションはすぐ近くなのだ。また、お隣からの苦情のため一代のリードで入ったラブホテル街も、私にはお馴染みの地区・・・？

そんな大阪風情いっぱいのおダサく原作の『秋深き』（1942年）と『競馬』（1946年）が、西岡氏の脚本によって、さてどんな人情物語に？

■□■稀な例だが、時々は・・・■□■

北新地のホステスと、そのホステスに入れあげた男が無事結婚へゴールイン。そういう話は稀だが、時々存在することはまちがいない。現に私が知っているケースでも2件あり、これはどちらも幸せな結婚生活を継続中・・・。

安月給の中学教師の寺田が一代が勤める北新地の高級クラブに毎晩通いつめるという設定には多少異議ありだが、烏龍茶しか飲まず歌も歌えないのに毎晩客としてきてくれる寺田に一代が心を打たれたのはまちがいない。八頭身でおっぱい自慢の一代が、ちんちくりんの寺田による位牌プロポーズにコロリと参ったのも意外だったが、ここらあたりのストーリー展開はリズム感があり面白い。

見合い話を断って北新地のホステスと一緒に暮らし始めた寺田に父親の倫太郎（渋谷天外）も母親の雅江（山田スミ子）もお手上げだが、そこで勘当云々と大騒ぎせず、「どうせ騙されて戻ってくるやろ・・・」と大きな心で暖かく見つめてやるのが大阪流・・・？婚姻届も未提出、結婚式もあげないまま2人は生國魂神社近くのマンションで共同生活を始めたが・・・。

■□■男だって嫉妬心の固まり - 男の嫉妬心 その1 ■□■

男は美人に弱いもの、そして男はおっぱいに弱いもの。それが寺田をみているとよくわかる。寺田にとって一代は憧れの女性だったから、本当にそんな女性と結婚できることになって寺田は有頂天。しかしちょっと待てよ。そんなすごい美人でそんなすごいおっぱいの持ち主と結婚したら、「そりゃ私だって、これまでに恋愛は何度も経験してきたけど・・・」と言っていた一代の過去の男関係への心配は・・・？

てな訳で、大阪人情物語「秋深き」のテーマの一つは、男の嫉妬心。男だって当然嫉妬心の固まりだ。そこで、男の嫉妬心その1として、「園田競馬場で待つ」と書かれた一枚の葉書と、その園田競馬場で「1 - 4！カズヨ！来い！」と馬券を握りしめながら叫ぶ“インケツの松”（佐藤浩市）との出会いを巡る面白いストーリーをじっくりと・・・。

■□■男だって嫉妬心の固まり - 男の嫉妬心 その2 ■□■

西岡琢也の脚本は男の嫉妬心の深さをさらに証明するべく（？）小谷治（赤井英和）という面白いキャラを登場させ、女房の浮気を疑う一見豪放磊落だが、心の中はうら悲しい夫の姿を徹底的に見せつけている。こんな役をやらせると赤井英和はピッタリだから、ひょっとしてこれだけで助演男優賞ノミネートの可能性も・・・？

ちなみに小谷の登場は浮気話の関連だけではなく、乳ガンでおっぱい的一方を失ったも

の、ガソリンを毎日お猪口一杯飲み続けることによって両方失うべきところを一方のおっぱいだけで助かったという、本当のような嘘のような話がこの映画のストーリー形成に大きく寄与するから、それにも注目！

■大阪モノでサトエリがいい味を■

私はサトエリこと佐藤江梨子の代表作である『腑抜けども、悲しみの愛を見せろ』（07年）を見逃しているし、『口裂け女』（07年）のサトエリは可もなく不可もなしといった程度（『シネマ14』382頁参照）。それに比べると、東京生まれながら大阪や神戸に住んでいたことがあって関西弁が話せるためこの映画に出演したサトエリは、大阪モノで実にいい味を出している。あれだけの長身、あれだけのおっぱい、あれだけの美貌があれば、北新地でもピカイチのホステスとして立身出世していくことは十分可能と思われるのに、なぜ寺田のようなちんちくりんの男と貧乏所帯を持つ決意をしたの？その落差が見モノだ。

また面白いのが、仏壇屋を営む寺田家では、母親が寺田の足の爪を切ってやるシーンが登場し、「夫の爪を切ってくれるような気立てのいい女を女房にしなければダメ」とアドバイスしていたが、今時そんな女は天然記念物・・・？ところが、北新地の一流ホステスだった一代は結婚した途端、寺田のために料理は作るわ、足の爪は切るわ、ときたからビックリ。ヘタすると男女差別を助長する映画と非難されるかもしれないが、そんな落差の大きい女一代をサトエリが好演！

■決してこんな真似をしないように！■

どんな世界でもビギナズラックがあるが、サイコロやルーレットはもとより、競輪、競馬、競艇など、あなた任せのゲームにお金を賭ける場合は特に、ビギナズラックは1度限りで割り切って深みに入らないことが大切。それを“インケツの松”は寺田にきつく忠告したのだが、ある日ついに寺田は、修学旅行のために生徒が貯めていた預かり金に手をつけるというヤバイ行動を・・・。

これは、乳ガンになったおっぱいを切らずに治すと決意した一代を応援するため、寺田がありとあらゆる「治療法」に走り始めたためだが、その中には怪しげな加持祈祷もあり、挙げ句の果てが120万円の壺。その壺を手に入れることができれば一代の乳ガンは絶対に治る。そう信じた寺田は再び園田競馬場へ行き約20万円の公金を次々と「1-4」の一点張りで賭けていったから大変。普通はそれでドツポにはまるものだが、寺田が最後のレースで「1-4」を引き当てたのは超ラッキー。しかし、善良な日本国民は決してこんなバカな真似をしないように！

■ちょっと悲しい結末だが・・・■

男性にとっての前立腺ガンと同じように、女性にとって乳ガンは一定の確率で避けるこ

とのできない病気。しかし、今や早期発見、早期治療を徹底すれば、最悪の事態は避けることができるはず。『愛と死を見つめて』（64年）で吉永小百合が演じた小島道子ことミコは、浜田光夫演じる高野誠ことマコの愛と応援のもと顔面半分を切りとるという軟骨肉腫の難手術に挑んだのに、一代はなぜおっぱい切除の手術をこれほどまでに拒否したの？それはきっと、おっぱいが大好きな寺田に対する愛情のため。また、寺田が怪しげな加持祈祷や壺に至るまで、ありとあらゆる民間治療（？）に奔走したのは、ただただ一代の乳ガンを治したいため。そんな二人の思いが結果的に空回りになってしまうこの映画の結末は、ホントに悲しいもの。

そもそも大阪人というのは、阪神タイガースへの熱狂的な応援ぶりをみてもわかるとおり、変なこだわりを持った人が多い。したがって大阪人である寺田はもちろん、ホントは大阪人ではない一代も、大阪での生活が身体にしみつくにしたがってそんな大阪人気質になってしまったようだ。そんなちょっと悲しい結末だが、そこでヘタってしまわないところがまた大阪的。何年間も成績が低迷していた阪神タイガースだって、2003年には星野仙一監督の下でみごと優勝したし、その後5年間続いた岡田政権下では常時優勝を争うチームに成長したのだから。

さあ、一代の死亡によって心の中にポツカリと穴が空いてしまった寺田だが、久しぶりに実家に帰り仏壇を選んでいる姿をみると、もはやすっかり立ち直っているよう。そして、あれだけブツリと切れていた親子の絆もきっちりと復活。BOROの『大阪で生まれた女』や、やしきたかじんの『やっぱり好きやねん』のように、大阪版ラブストーリーはどこかに不滅のど根性が・・・。

2008（平成20）年11月4日記



「秋深き」
DVD発売中
¥3,990（税込）
発売・販売元：東宝